

平成14年7月5日

国土交通省近畿整備局長 様
紀ノ川流域委員会委員長 様住民要望者
橿原市
奥 井 満 雄

要 望 書

第9回の同委員会に参加させていただきました。

梅雨も本番の時期になりますがまとまった雨がまだ無くいよいよ吉野川・紀ノ川治水対策となっています。当たって欲しくない予想です。

近年の気象はおかしいと感じている人は年齢が高い人ほど多いのでは。

また一人では何も出来ないことも感じているのでは無いでしょうか。

第9回に掲載して頂いた「地球憲章」の国連採択に向けての映画「静かなる革命」を鑑賞して環境問題解決の指標としての内容に感動しました。

今こそ、地球規模の環境対策を心一つにして、次世代の人々とも行動を開始していくべきであるとの内容に私も同感です。

同委員会、同勉強会、一般参加者の関係者のみなさまにおかれましても、是非鑑賞して頂きたく「ご案内及びビデオ」を謹呈いたします。

多くの方に見ていただけますようご配慮の程よろしくお願いいたします。

今後とも紀ノ川流域委員会は素々と二十一世紀にふさわしい自然エネルギーによる再生能力が発揮できる流域住民がつくる河川づくり、地域づくり、水環境の健全化などに向かって取りまとめられますよう期待いたします。

- A quiet revolution - (静かなる革命)ご案内

循環型社会(持続可能な開発)形成の啓発に最著:

・地球サミットプロモーションの映画であり、地球環境を研究されている方には時をえた必見のものです。

・この「静かなる革命」はスロバキア環境庁主催・国際環境映画祭で「スポレン工科大学学長賞」を受賞(02.5.10)し、本年4月ニューヨーク国連本部での地球サミット準備委員会でも上映され環境問題への啓発作品として各国から高い評価を得ています。

・この映画は地球評議会が、国連環境計画 UNEP、国連開発計画 UNDP と非政府機関の SGI のスタッフによって 2002 年地球憲章国連承認に向けて制作されています。

・主要なテーマは「一人の人間に世界を変えていく力もあり、責任もある」であり、これは地球憲章の啓蒙を通じて地球評議会が一貫して訴えてきたメッセージとなっています。

・ナレーターには 20 世紀を代表するアカデミ賞受賞女優のメリル・ストリープがボランティヤで参加、またアナン国連事務総長、UNEP 事務局長のトファー氏、地球憲章のワンガリ・マターイ女史がインタビューを通じて出演しています。

・主な上映場所としては、

● 02 年 2 月フランス・リヨンでゴルバチョフ、モーリス・ストロング氏が主催する地球憲章会議にて上映。

● 02 年 4 月ニューヨーク国連本部での地球サミット準備委員会でも上映。

● 02 年 5 月パリで開催された地球サミット準備委員会でも上映。

● 02 年 5 月 19 日フィリピン PTV4 チャンネルで放映。

● 02 年 6 月 2 日インドネシアバリ島におけるヨハネスブルグサミット準備会合に関連した地球憲章パートナーシップ会議で上映。

● 02 年 6 月 28 日アメリカ国営放送 PBS-KCET で放映されています。

● 02 年 8 月 28 日環境開発サミット映画祭で一般公開決定。

・「地球憲章」の経緯(広中和歌子 HP02.5.13 より)

① 1945 年国連が設立されたときに、世界の安全のためのアジェンダは平和、人権、社会経済の公平な発展を強調していたものであった。

国連を舞台に、世界の国々及び様々な非政府機関によって開発と環境保全を効果的にバランスよく統合するグローバルな同盟を形成するため

② 1982 年国連総会で自然に関する世界憲章を採択

③ 1987 年世界委員会 WCED は「我らの共有の未来」の報告書を発表。

④ 1992 年地球サミットで「地球憲章案」提出

⑤ 1997 年第一回地球憲章委員会の開催、「地球憲章ベンチマークドラフト」を発表。

⑥ 1997 年京都第三回地球温暖化防止会議の開催。

⑦ 2000 年 3 月地球憲章委員会最終的な「地球憲章」が完成。

⑧ 2000 年 6 月同憲章を発表。

⑨ 2002 年 8 月国連リオ+10 総会で承認予定。

*裏面はこの映画のすじがきです。

映画「静かなる革命」(26分)のすじがき

いま、「人間の安全保障」という課題を人類は真剣に考えなければならない。地球規模の危機を前に多くの人々は無力感を感じている。

しかし、その中で一人の人間が立ち上がり変革を起こしている。そしてその行動はその国の未来にまで影響を及ぼしている。作品はインド、東欧、アフリカでのケースを追い、21世紀人類の生命を脅かす深刻な問題を取りあげている。

●水資源：

インド・ニーミ村では水不足で村が壊滅状態だった。作物は育たず、人々は飢えと乾きで苦しんでいた。一人の人間が立ち上がり、智恵をつかい、雨水農法を導入。事態はみごとに一変した。NGOの協力もあり、ニーミの成功例から学ぼうと、インドの様々な村が自発的に導入しようと集まった。一人の人間の行動が環境と人民を救った。

●残留生有機汚染物質 (POP)：

東欧、スロバキアのゼンプリンスカ・シラバ湖には毎夏数十万人の観光客が訪れ、最も危険である大量のPCBで汚染されている湖に人々は知らずに遊泳や釣りを楽しむ。

この状況に危惧した環境汚染の専門家マーチン・ミューリン氏は政府機関、市民団体に訴えかけ、運動を起こしていく。

●森林問題：

ケニアの生物学者、ワンガリ・マータイ女史は絶え間ない森林伐採が自国の環境を永久的に破壊してしまうことを危惧する。しかし、貧困にあえぐ国民は薪を求め、森林を伐採せざるをえない。木がなくなると、土壌を浸食し、土地は砂漠化する。マータイは立ち上がり、農村地域の女性をあつめ、植林運動「グリーン・ベルト運動」を開始した。これらの女性たちの手で200万本の木が植樹されたのである。

マータイは彼女たちを「教育も受けていない裸足の林学者」と呼ぶ。政府や、遠い外国の誰かが生活を変えてくれるのではない。変革を起こすのは一人の人間の勇気と行動なのである。

コフィー・アナンは言う「やるべきことは山ほどある。でも不可能なことではない。必要なのは意志と協力し合う心です」と。